

## 若者と共に

よこはま西部ユースプラザ  
伊藤宏美



現在、よこはま西部ユースプラザに勤務し、フリースペースで若者と過したり、野外の活動をしています。

フリースペースでは、パソコン・ギター・手芸・お茶会などさまざまな講座を行っており、無理せず、自分の好きなことを自分のペースでできる場所になっています。また、野外では公園整備や里山、援農、野菜販売などの体験活動を行っています。

この二つの体験活動はそれぞれ若者の違った一面、今までにない笑顔や言葉・仕種を引き出す機会となります。野菜販売の活動では、小さな声しか出せなかった若者が、回を重ね自信をつけて、大きな声で「いらっしゃいませ」と言えるようになりました。そんな場面に立ち会えることが、私にとっての喜びとなっています。

また、活動を通して若者や多くの人たちとの出会いによって生まれた思いがあります。それは、なんでも相談できる人を作ること。相手を育てるのではなく、寄り添い共に歩み、共に学ぶこと。相手の思いと自分の思いは同じではないことを踏まえ、相手を受け止めて自分の言葉で表現すること。相手と同年齢の時にどのように考えていたかを思い出すこと。そして、生きていることの大切さを忘れないことです。

この思い出を日々心に留めて、若者と一緒に歩んでいきたいと思えます。今日までに出会えた方々に感謝いたします。

## 市民が担う見守りの大切さ、難しさ

では、虐待に気付いた時、私たちはどうしたら良いのでしょうか。

「専門機関は具体的に虐待の問題に介入していきませんが、予防という視点からは限界があります。

近隣のことを気にかけて、罵声や泣き声が聞こえると、相談電話に通告をくれる地域の方々がいます。

『もしかすると虐待が起きているのでは』と、子どもの安全を常に見守ってくれている目が地域にあることが大事です。一方で、地域

の見守りは諸刃の剣であるともいえます。以前は、地域社会の中

で、子育てを補填してくれる人や環境がありました。今では支え

あう人間関係がない状況にあります。専門職が対応していても、泣

き声が聞こえ続けた場合、近隣から様子を見に行つてほしいと頼

むのは難しく、また通告者が何事もないかのように、その家庭に関

わることはとても過酷です」

## 社会で育てる気持ちを広げる

それでも、子どもを守るために、

子育てを見守る親以外の大人の存在は大切だと山田さんは話されま

す。「例えば子育てサロンなどを通じ、子育てを見守る人がいるこ

とは虐待予防につながります。虐待をみかけて専門機関に相談をし

てくれるなど、子どもの安全を守つてくれる人など、地域の方たち

が、自分のできる方法で気にかけてほしい。こうした取り組みによ

り、身近なところで、子育ては大変だということや、親が自分から

SOSを出しやすい風土や雰囲気を作るにつながります。また

親自身も、そうした取り組みは周囲が子育てのチェックをするわけ

ではなく、子どもの安全を心配しているから気持ちを向けているのだと、考えてくれるきっかけとなるのではないのでしょうか」

そして、「『あの家庭は仕方ない』『あの親から生まれた子どもはかわいそう』ではなく、地域の方がそれぞれの目で、子育て家庭を支え、子どもを社会で大事に育てようと、共通に思えることが大切です」と結んでくださいました。

(企画調整・情報提供担当)